

5月6日 復活節第4主日

使 13:14,43~52 黙 7:9~17 ヨハ 10:27~30

1. ヨハ

私たちはミサにおける福音書の朗読を特別に大切に、いつも起立してこれを拝聴し、朗読が終わると“キリストに賛美”と交唱します。

福音書を通して私たちに語りかけてくださるキリストは、復活して今は天におられる“現在のキリスト”であることを、特に強調したいと思います。私たちは聖書という書物の中に保存されている2千年前のイエスの言葉から、現代に役立つ何かを聞き取ろうとしているではありません。私たちの主イエス・キリストは生きておられます。この方は将来「生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト」(II テモ 4:1)です。この“現在のキリスト”が、ミサにおける福音書の朗読を通して私たちに語りかけてくださいます。

vv.27-28 「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。」

私たちがその声を聞き分けるキリストは、十字架の血によって私たちの罪を洗い清め、永遠の命を与えてくださった復活のキリストなのです。私たちは終末の日には、このキリストと共に神の国を相続することになるのです(ロマ 8:17)。

2. 使

イエス・キリストによる救いの福音は、先ず第一にユダヤ人(古きイスラエル)への福音であったことを忘れてはなりません(13:26,46)。現代のイスラエル共和国はこの古きイスラエルの再建であるということへの理解を、私たちキリスト者は深めるべきだと思います。「神は御自分の民を退けられたのであろうか。決してそうではない」(ロマ 11:1)、「神の賜物と招きとは取り消されないもの」(ロマ 11:29)という聖書の言葉に心を向けましょう。なぜなら使徒パウロが ロマ 9:4-5 で語っている叫びを聞くと、初めて私たちは今朝の使徒言行録の“異邦人たちの喜び”(v.48)を正しく解釈することが出来ると思うからです。それまでは「キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていた」(エフェ 2:12) 異邦人が、「福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをユダヤ人と一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者となる」(エフェ 3:6)ということが始まったのでした。

v.47は イザ 49:6 の引用で、これはイザヤ書の“僕の歌”の第二番の結尾の言葉です。紀元前6世紀の、バビロン捕囚からのイスラエルの帰還と再建の預言である“僕の歌”の中に、既に神の救いがイスラエルから異邦人の世界に広がって行くことが約束されていました。この約束が歴史上の出来事となって展開して行った報告を、私たちは今朝聞いているのです。

当時のアンティオキア在住のユダヤ人たちが、たまたま誤った判断をしてしまって、キリストの福音の宣教者パウロとバルナバを迫害したために、いわば偶然の成り行きとして異邦人の世界にキリスト教が広まることになった……と考えてはなりません。神は人間の罪や過ちや不信仰をさえ用いて、御自分の救いの計画を実現して行かれるのです。「あなたがたの救われたのは恵みによるのです」(エフェ2:5)とある通りです。

3. 黙

ヨハネが見た天上の礼拝の幻には、主イエス・キリストの贖いによって救われた全世界からの「数えきれないほどの大群衆」(v.9)が、大声で賛美の歌を歌っていました。

洗礼の秘跡に際して受洗者に着せられる白衣は、神の小羊であるキリストの血によって罪を洗い清められた天上の礼拝者たち(v.14)に習うためです。やがて訪れる終末の日に私たちに神の国を受け継がせてくださり、私たちを天上の礼拝に導いてくださるのは、復活して今は父なる神と共におられる“現在のキリスト”です。

このキリストが、司祭を代理者として、司祭の姿で、今朝も私たちのミサを司ってくださっています。実に「ミサの祭儀は、キリストの行為」(ミサ典礼書の総則1)なのです。

アーメン、ハレルヤ。

5月13日 復活節第5主日

使 14:21～27 黙 21:1～5 ヨハ 13:31～35

1. 使

使徒パウロの第一回目の伝道旅行は、紀元48～49年頃に行われたと思われませんが、これによって小アジアのピシディア州にあるアンティオキア、イコニオン、リストラ、デルベ等の町々に、異邦人を主体とする教会が誕生しました。パウロは「弟子たちのために教会ごとに長老たちを任命し、断食して祈り、彼らをその信ずる主に任せた」(v.23)と書かれていることから、私たちは“キリストの祭壇を囲んでミサをささげる群”が生まれたことを知ります。

ここで使徒パウロの働きの概略を箇条書きにすれば(聖書はそれを当然のこととして、あえて説明していないのですが……)、それは次の通りになるでしょう。

- ① パウロたちは「主の言葉」(キリストの福音)を宣べ伝えた。
- ② 信じた人々に洗礼を授けた。
- ③ 彼らが主日のミサを共にささげるために、教会ごとにミサを司式する“長老”(司祭)を任命(叙階)した。

これらの教会が、当時の他の宗教団体やグループと明確に違っていたことは、これが“共にミサをささげる群”であったということでした。そのような教会の誕生と成長こそが新約聖書の背景になっていることを、私たちは忘れてはなりません。

2. ヨハ

v.34 「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

教会が共にささげるミサは、イエス・キリストの受難と復活によって始まった全く新しい交わりでありました。“互いに愛し合う”ということ、単なる同胞愛と考えるだけなら、それは古くから語られて来たことでした(レビ19:18、マコ12:31)。しかしヨハネ福音書は、教会が主日ごとに集まって共にミサをささげる群であることが“新しい”のだと語ったのでした。主イエス・キリストが最後の晩餐で、御自分のからだと血による感謝のいけにえを制定し、私たち教会に御自分の死と復活の記念を託されたことこそが、「新しい掟」という言葉でヨハネ福音書が語っている内容なのだということを、私たちキリスト者は理解しなければなりません。

主イエス・キリストは復活して天に昇られ、私たち教会は今地上にあります。しかしその地上の教会、歴史の教会は、ミサを通してキリストと結ばれているから、“新しい群”、“新しい民”なのです(Ⅱコリ5:17、Ⅰペト2:9)。互いに愛し合う愛が、共にミサをささげる群である教会を「造り上げる」(Ⅰコリ8:1)のです。

5月20日 復活節第6主日

使 15:1-2,22-29 黙 21:10~23 ヨハ 14:23~29

1. ヨハ

v.27 「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」

“平和”という言葉は、私たちがそこで生まれ育ち歩んで来た 20 世紀という時代に大いに叫ばれたり論じられたりした、とても身近な用語の一つです。二つの世界大戦を経て、西欧先進諸国は国際平和を願うようになりました。そしてその流れの中で、戦後半世紀余の日本の平和主義も存在した訳です。これと並行してもう一つの平和が、恐らくキリスト教的文化の強い影響のもとに日本人の心を捕えました。精神的内面的な心の平和のことです。いずれにしても、私たちは“平和、平和”という掛声と共に育ち、歩んで来た世代なのだということが出来ます。

しかしヨハネ福音書が語っているのは、国際平和のことでも個人の心の平和のことでもないのです。「わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない」という主イエスの言葉に注意を向けましょう。v.27 は、「反戦平和のために活動することがキリスト教会の使命である」などという主張とは、何の関係もありません。

2.

私たちのミサには、二つの中心があります。それは“ことばの典礼”と“感謝の典礼”です。まん丸い円には中心が一つしかありませんが、長円には中心が二つあって、そのどちらの一つが欠けても長円が成立しないように、“ことばの典礼”と“感謝の典礼”はそのどちらが欠けてもミサが成り立たなくなります。

この“感謝の典礼”の中で、叙唱に続いて歌われる歌が“感謝の賛歌”です。これは奉献文そのもの一部をなしており、全会衆が司祭と共に歌います。司祭が唱える奉献文を一同が拝聴し、会衆は定められた応唱を通してこれに参加して、拝領による交わりへと導かれて行きます。そして“平和のあいさつ”の後で司祭がパンを割り、パンの一部をカリスの中に入れる間に歌われるのが“平和の賛歌”です。この歌は通常先唱者か聖歌隊が「神の小羊、世の罪を除きたもう主よ」と歌うと、会衆は「われらをあわれみたまえ」と応唱し、これを繰り返して最後の回に「われらに平安を与えたまえ」で結びます。

教会はミサの中で歌われる“平和の賛歌”で、主イエス・キリストが与えてくださる「平和」を、実に適切にまた正しく伝承して来たのでした。ミサ、特にその中の感謝の祭儀は、主イエス・キリストが私たちに「平和」を与えてくださる過越の会食であることを、初代教会から現代に至るまで使徒継承によって受け継がせ続けてくださった神の摂理を思いましょう。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る」(v.23) とは、何よりも先ずミサを大切に、共にミサをささげることの意味しているのですから。

3. 使

異邦人教会の目覚ましい発展に伴って、ユダヤ教の律法主義をキリスト教会の中で受け継ぐべきかどうかに関して意見が別れた経緯は、新約聖書全体にその論争の痕跡が残っています。キリスト教が自らの聖典の一部として受け入れた旧約聖書を重んじて、その適切な解釈を追い求めて行くことは、現代においても大切なことなのですが、そのことといわゆる“律法主義”とは区別して考えなければならないことです。

エルサレムの使徒会議が開かれたのは紀元49頃のことでした。ここで明確にされた使徒たちの決定は、キリスト教会がいわゆるユダヤ教の律法主義ではなくて、新しい“共にミサをささげる群”としての行きかたを優先させたということでした。キリスト教会は旧約聖書を捨てたものではありませんでした。古いモーセの契約と絶縁したのでもありませんでした。そうではなくて、共にささげるミサの中に(キリストの福音の光で再解釈されて)旧約聖書は受け入れられ、当時のユダヤ教の律法主義とは別なものになったのでした。

4. 黙

このような初代教会の福音理解が、新約聖書という形で現代まで伝えられて来ています。そして同様にミサ典礼書も、貴重な福音理解の伝承を今日に伝えるのに大いに役立っています。

今朝の朗読聖書から私たちが理解できる「平和」とは、ミサ、特にその中の“感謝の典礼”を通して復活のキリストが与えてくださる平和です。それは人間が作り出すようなものでも、この世が与えてくれるようなものでもありません。そして黙示録が「新しい天と新しい地」と説明している神の国の到来する日に、「全能者である神(御父)、主と小羊(御子イエス・キリスト)とが」(v.22) 私たちとの間に持ってくださる「平和」こそ、まさに主イエス・キリストがミサを通して与えてくださる平和なのです。

神との平和、神の国の平和を与えてくださる復活のキリストに賛美！

アーメン、ハレルヤ。

5月27日 主の昇天

使 1:1~11 ヘブ 9:24-28, 10:19-23 ルカ 24:46~53

1. ルカ

キリスト教会の信仰は、聖伝と聖書によって代々に伝えられ保たれて来ました。この両者は使徒たちの証言であるということを、私たちは再確認したいと思います。私たちの主イエス・キリストはその復活の後、使徒たちに神の国の福音を解き明かして言われました。

vv.47-48 「エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。」

主は天に昇られ、地上の教会は使徒的宣教によってその再臨の日までの信仰の旅路を歩むこととなったのでした。

現代は人々が自由に聖書を書店で買い求めて読むことの出来る時代です。全世界の数えきれないほど多くの言語に翻訳された聖書が、各地の聖書協会の熱心な頒布活動によって人々に届けられています。私たち日本人も“新共同約聖書”という本当に素晴らしい日本語訳聖書を手にする事が出来るという形で、大いに日本聖書協会の恩恵に与かっています。

私たちが聖書を自分で読み自分で学ぼうとするときに、その前提として、これが使徒たちによるキリストの福音の証言なのだということを理解することは、とても大切なことです。と言うのは、この前提そのものが無視されたり、別の思想やイデオロギーに意図的に置き換えられた“不健全な聖書主義”が、世界中で少なからず猛威を奮っているからです。

使徒たちが証言しているキリストの福音の基礎になっているものは、復活の主イエス・キリストによって彼らの心の目が開かれ、教えられた旧約聖書の再解釈でした。

vv.46-48 「次のように書いてある。“メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる”と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。」

私たちはこの使徒たちの証言によって福音を聞き、神の国の希望に生きているのです。

2. 使

使徒たちはイエスが天に昇って行かれるのを見送りました。「雲に覆われて彼らの目から見えなくなった」(v.9)と述べられている通り、それ以来だれも主イエスを肉眼で見ることは出来なくなりました。しかしこのイエスを私たちは必ず再び見るようになります。

v.11 「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

私たちキリスト者たちだけではなく、全世界の人々が見ることになるのです。「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る、ことに、彼を突き刺した者どもは。地上の諸民族は皆、

彼のために嘆き悲しむ。然り、アーメン。」(黙 1:7)

3. ヘブ

使徒的宣教によってキリストの福音を信じた人々にとっては、この日は希望の日です。

10:23 「約束して下さったのは真実な方なので、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう。」

20世紀のキリスト教が抱えていた多くの問題を、私たちはよく知っています。その中で生まれ、その中で育って来た私たちが、今21世紀の初めのところに立っています。21世紀の教会は私たちから始まり、私たちの次の世代へと受け継がれて行くこととなります。ですから20世紀の教会が抱えていた多くの問題への真摯な反省こそが、私たちに出来る最大の「悔い改めにふさわしい実」(ルカ 3:8)であり、それこそが21世紀の教会に希望を与えることになると思うのです。

その20世紀の教会が抱えていた問題の中の一つが、「また、人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっている」(9:27)という聖書の言葉を、使徒的証言、使徒的宣教の本質的な一部として誠実に受け入れることをしなかったという点です。死は神の裁きであること、死は神に見捨てられ取り去られることなのだということを、20世紀の多くのキリスト者は決して認めようとしませんでした。

しかし、主イエス・キリストがその受難によって私たちに代わって負って下さったのは、正に“神に見捨てられること”だったのでした。

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」(マコ 15:34)

死後の裁きを逃れ得る人はだれもいません。しかし終末の日の再臨のキリストについて、使徒の証言は次のように述べています。

「この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来たるべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。」(1テサ 1:10)

主の昇天の祭日に、私たちは使徒の証言に心を開こうではありませんか。

10:23 「約束して下さったのは真実な方なので、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう。」 アーメン、ハレルヤ。